

日本人と英語母語話者の会話に対する態度の検討¹

志水 勇之進・小川 一美

要旨

本研究では、会話意識尺度、Willingness to Communicate (WTC) Scale, Unwillingness to Communicate Scale (UCS) の3尺度に着目し、日本人と英語母語話者の会話に対する態度を検討した。因子分析の結果、会話意識尺度においては、日本人では「沈黙懸念」といった因子が抽出されたのに対し、英語母語話者では「沈黙への関心」となった。WTCでは、日本人では会話をする相手との面識の有無によって因子が構成されたのに対して、英語母語話者では、会話場面の負荷の程度によって項目がそれぞれ集約された。UCSはいずれの参加者においても先行研究と同様に「Approach Avoidance (接近)」と「Reward (報酬)」が抽出された。次に、下位尺度間相関を算出した結果、日本人と英語母語話者では関連の仕方も異なっていた。また、各下位尺度と人口統計学的変数との偏相関係数を算出した結果、いずれの参加者においても年齢が会話意識尺度の「視線不安」と負の相関を、「会話への得意意識」と正の相関を示したが、日本人ではさらに「聴覚情報への関心」と正の相関を示すなど違いがみられた。さらに、日本人では、会話意識尺度の「会話への得意意識」とUCSの「Reward (報酬)」において、英語母語話者では「内面的関心」において女性の方が男性よりも有意に得点が高かった。

キー・ワード：会話に対する態度、会話意識尺度、Willingness to Communicate Scale, Unwillingness to Communicate Scale

問題と目的

近年、「コミュニケーション力」が重要視されている。こうしたコミュニケーション力への関心の高まりに伴い、二者間において行われる対人コミュニケーションにも関心が集まっている。対人コミュニケーションは、送り手、メッセージ、チャネル、受け手、効果の5つの要素から成るとされるが(小川, 2012), その中でも特に送り手の記号化スキルと、受け手の解読スキルが重要であるとされている。記号化スキルとは、自分のメッセージを適切に表出する能力であり、一方で解読スキルは、送り手の発信するメッセージを正確に読み取る能力を指す(大坊, 2008)。いずれもENDCOREモデルに知られるように、コミュニケーション・

スキル(社会的スキル)を構成する側面であるとされ(藤本・大坊, 2007), 大坊(2006)は、記号化の能力と解読の感受性を正確に活性化することが対人関係の基本であり、そのことが円滑な関係をもたらす要因であるとしている。

記号化や解読に関しては、文化差についても多くの知見が積み重ねられてきた。文化間における情動表出の違いを説明する理論として、Ekman(1973)は、神経文化モデル(Neuro-Cultural Model)を提唱している。このモデルでは、特定の情動状態と顔面筋の間の連合を普遍的なものとして、つまり、生物学的基盤であるものとして捉えている一方で、情動表出の文化間変動を説明する表示規則(Display Rules)を仮定している。表示規則とは、ある社会的場面において、どのような情動を感じているかを示すべき、あるいは示さないべきかといった、適切な表出行動についての社会的・

¹ 本研究の一部は、日本心理学会第86回大会で発表された。

文化的規範や慣習である (Ekman, 1973; Ekman & Friesen, 1969; Ekman & Friesen, 1975)。このような表出行動は、それぞれの文化で固有的に存在するとされ、Ekman & Friesen (1975) は、表示規則の文化固有性の検討として、日米大学生の比較実験を行っている。結果として、一人である場面では日本人大学生とアメリカ人大学生の情動表出に違いはみられなかったが、他者がいる場面では、日本人はアメリカ人と比べて情動表出を抑制したことが報告されている。このことは、日本の文化において、社会的・公共的な状況では、情動表出を抑制する表示規則が存在するため、日本人とアメリカ人の情動表出においてそのような違いがみられたとされる。表示規則の他に、文化間における情動表出の違いを説明する理論として感情の方言理論 (Dialect Theory of Emotion) が挙げられる (Elfenbein, 2013)。この理論は、基本的には前述した神経文化モデルと同様に、情動の普遍性を肯定する一方で、情動の表出には文化による違いがあることを、言語になぞらえて説明している。すなわち、情動表出には、言語と同じように、方言やアクセントが存在するとの考えである。同じ文化に属する者たちの間では共通した情動表出の規則、またはパターンがあるとし、それは異なる文化背景を持つ者には伝わりにくいとされる。

これらの知見は、情動表出のみならず、解読における文化差を理解するうえでも有用である。これまでの研究において、情動を表出する送り手と、そのメッセージを知覚し、解読する受け手が同じ文化的背景を持つ場合 (内集団)、異なる文化的背景を持つ場合 (外集団) よりも正確に情動を判断できること、すなわち内集団優位性 (in-group advantage) が確認されている (Beaupré & Hess, 2005; Elfenbein & Ambady, 2002, 2003; Elfenbein, Beaupré, Lévesque, & Hess, 2007; Matsumoto, 2002)。また、Buck (1984) は、情動表出のパターンや程度に作用する文化固有的な社会的規範である表示規則の概念と同様に、解読規則 (Decoding Rules) を提唱している。解読規則とは、他者の情動表出からその内面的情動状態である主観的経験について解釈する際に用い

られる規則であり、情動についての情報のどこに注意を払うか、またどのように解釈するかについての文化的規則、または期待であるとされる。Matsumoto (1999) は、アメリカ人と日本人参加者に顔画像を呈示し、表出者の表情に情動が表れた程度と、表出者がその情動をどの程度感じたか、つまり表出者の主観的経験の強度の推定を求め、アメリカ人と日本人の解読パターンを比較した。結果として、アメリカ人は、主観的経験よりも表情に表出された情動の強度を高く評価する傾向を示した一方で、日本人においてはそれと反対の解読パターンがみられた。このことは、日本において、社会的・公的な状況では主観的経験は抑制されたうえで表出されやすいという表示規則の影響を表しており、表示規則と解読規則は切っても切り離せないものであるといえる (中村, 1991)。これらのことを踏まえると、対人コミュニケーションについては、文化的な差異を考慮したうえで検討することが不可欠であると考えられる。

コミュニケーション行動は、他者との関係性や送り手・受け手の双方の年齢や性別、そしてその場を取り巻く状況といった文脈情報や、動機付けなど、様々な要因に依存しうることが指摘されている (中村, 2000)。木村・磯・大坊 (2004, 2011) では、相手との関係継続の予期や意思が強い場合にコミュニケーションの動機が促進され、その結果視線量や発話量などのコミュニケーション行動が増加したことが示されている。その他にも、シャイネスのような個人特性について着目して、コミュニケーション行動との関連を検討した研究もみられる。シャイネスは、「特定の社会的状況を越えて個人内に存在し、社会的不安という情動状態と对人的抑制という行動特徴をもつ症候群 (相川, 1991)」と定義され、シャイネスの高さが全般的なコミュニケーション量の少なさや (遠矢, 2003)、他者の表出行動への感受性の低さなどと関連することが確認されている (多川・小川・斎藤, 2006)。会話やコミュニケーションに関する個人差を検討した研究の多くは、主にシャイネスをはじめとする、相互作用場面での不安特性や回避行動に焦点を当てている。しかしながら、実際にどの程度他者との相互作用に従事するか

ついて影響を与える特性や態度は、そのようなネガティブな側面のみではない。すなわち、会話やコミュニケーションという他者との相互作用事態に対する関心や感受性、積極性といった、必ずしもネガティブとはいえない認知的側面も考慮することが必要であると考え。そこで、本研究では、他者との相互作用場面に対して個人が持つ認知的な「構え」であり、会話やコミュニケーションをどのようなものとして感じ、どの程度積極的に従事しようとするかを、「会話に対する態度」とする。そのうえで、他者との会話場面に対する態度にはどのような側面があるのかについて検討することで、会話やコミュニケーションに対する認知的な側面をより広範に捉えることが可能になると考える。これまで、多くの研究において記号化や解読行動などのパフォーマンスについて検討がされているものの、個人が会話やコミュニケーションに対してどのような態度を持ち、それらがどのように形成されているかを検討した研究は少なく、さらにそのような態度を検討した研究の多くは不安特性や回避行動に主に焦点を当てていることが現状である。会話やコミュニケーションに対する態度や意識などを含む、構えのような認知的側面にも焦点を当てることで、より包括的に対人コミュニケーションを捉えることができるであろう。また、このような認知的側面における差異が、個人がどの程度会話やコミュニケーションに従事しようとするかといった動機付けのような側面にも作用し、コミュニケーション行動に質的・量的な影響を及ぼす可能性が考えられる。さらに、前述したような、記号化や解読行動における文化的影響を考慮すると、コミュニケーションや会話に対する態度にも文化の影響がみられる可能性がある。しかしながら、コミュニケーションや会話に対する態度について文化比較的に検討した研究もみられないことから、本研究では日本人と英語母語話者の会話に対する態度の特徴を探ることを目的とする。

会話に対する態度を測定する尺度はいくつかあるが、本研究では、会話意識尺度（斎藤，2002），

Willingness to Communicate Scale（McCroskey, 1992），Unwillingness to Communicate Scale（Burgoon, 1976）の3尺度に着目する。これらの尺度は、会話やコミュニケーションに対する態度を測定するものであり、具体的には、会話意識尺度は、会話という事態をどのように意識するか、会話事態に対する関心や感受性の程度に関する個人差に着目した尺度であり、斎藤（2002）において作成された。Willingness to Communicate Scaleは、McCroskey（1992）によって作成された、特定のコミュニケーション状況において会話を始めることにどの程度積極的か、消極的かを測定する尺度である。そして、Unwillingness to Communicate Scale（Burgoon, 1976）は、コミュニケーションを避けたり軽んじたりする、また会話自体を報酬的とみなす慢性的傾向を測定するものである。いずれも、特性的・状態的なコミュニケーションに対する不安の程度を測定する既存の他尺度（Booth - Butterfield & Gould, 1986 など）とは異なり、本研究の目的である、他者との相互作用場面に対しての関心や感受性、積極性といった認知的側面を測定する、信頼性と妥当性を十分兼ね備えた尺度である。これらの尺度を用いて、本研究では、日本人と英語母語話者の会話やコミュニケーションに対する態度の内容的特徴を明らかにするため、まず各尺度の因子構造について検討し、各尺度の下位尺度間の関係についても検討する。次に、会話やコミュニケーションに対する態度が性別、年齢、客観的な社会経済的地位、主観的な社会経済的地位といった変数とどのような関係を持つのかについて探るため、各尺度の下位尺度と人口統計学的変数との関連について検討する。

方 法²

調査対象者

日本人 20代から60歳以上の各年代男女50名以上のクラウドソーシングサービスであるLancersの登録者に、Qualtricsで設計した調査に対して

² 本研究は、第二著者所属の愛知淑徳大学心理学部倫理審査委員会の承認の上、愛知淑徳大学特定課題研究助成を受けて実施された。

オンラインで回答を求めた。492名の回答者の中から、「この質問はあなたの考えにかかわらず、『まったくあてはまらない』を選んでください」といった3項目のDirected Questions Scaleのいずれかに対して誤った回答をした4名を除外し、488名（男性252名、女性235名、その他1名。平均年齢44.25歳、 $SD=13.32$ ）を分析の対象とした。

英語母語話者 20代から60歳以上の各年代男女50名以上のクラウドソーシングサービスであるProlific Academic Platformの登録者に、Qualtricsで設計した調査に対してオンラインで回答を求めた。510名の回答者の中から「This is a control question. Please select『Strongly disagree』.」といった3項目のDirected Questions Scaleのいずれかに対して誤った回答をした16名、人口統計学的変数への質問に対して未回答であった8名、英語母語話者ではないと回答した15名を除外し、最終的に471名（男性238名、女性233名。平均年齢39.94歳、 $SD=14.17$ ）を分析の対象とした。

調査項目

会話に対する態度を測定するために使用した尺度は以下の通りであった。

会話意識尺度 斎藤（2002）によって作成された32項目を用いた。本尺度は、会話事態に対する意識、関心、感受性の程度に関する個人差を測定する尺度であり、「話し相手のアクセントやイントネーションが気になる」といった7項目から成る表面的関心、「話している相手がどのような気持ちでいるか気になる」といった8項目から成る内面的関心、「自分が話しているとき、じっと見つめられると話しづらい」といった6項目から成る視線不安、「親しい人と話すとき、沈黙が気になる」といった6項目から成る沈黙懸念、そして「話の間があいたとき、自分から話を切り出すことができる」といった5項目から成る会話スキルという5つの下位尺度で構成されていた。各項目について、「1 まったくあてはまらない」から「よくあてはまる」の5件法で回答を求めた。なお、英語母語話者に対しては、著者らが協議のうえ英訳した32項目について、「1 Strongly

disagree」から「5 Strongly agree」の5件法で回答を求めた。

Willingness to Communicate Scale（以下 WTC） McCroskey（1992）によって作成された12項目を用いた。本尺度は、12のコミュニケーション状況について、会話を始めることに積極的か消極的かを測定する尺度であった。項目は、話し相手3種類（Stranger, Acquaintance, and Friend）と、コミュニケーションの状況4種類（Dyad, Group, Meeting, and Public）の組み合わせによる7つの下位尺度で構成されていた。例えば、「Present a talk with a group of strangers.」という項目は、話し相手がStrangerで、コミュニケーション状況はPublicとなる。各項目について、「0 never」から「100 always」で回答を求めた。なお、日本人に対しては、著者らが協議のうえ日本語訳した12項目について「0 まったく行わない」から「100 常に行う」で回答を求めた。

Unwillingness to Communicate Scale（以下 UCS） Burgoon（1976）によって作成された20項目を使用した。本尺度は、コミュニケーションを避けたり軽んじたりする、また会話自体を報酬的とみなす程度についての慢性的傾向を測定する尺度であり、2つの下位尺度から構成されていた。1つ目は、「I'm afraid to speak up in conversation.」といった10項目から成る、積極的にコミュニケーションに従事するか否かの傾向であるApproach Avoidance（以下 AA; 接近）であった。2つ目は、「I don't think my friends are honest in their communication with me.」といった10項目から成る、家族や友人とのコミュニケーションから報酬を受けていると感じるか否かに関するReward（以下 R; 報酬）であった。各項目について、「1 Strongly disagree」から「7 Strongly agree」の7件法で回答を求めた。なお、日本人に対しては、著者らが協議のうえ日本語訳した20項目を「1 まったくあてはまらない」から「7 とてもあてはまる」の7件法で回答を求めた。

人口統計学的変数 性別、年齢、客観的な社会経済的地位（教育程度、年収）、主観的な社会経

済的地位を測定した。教育程度は、中学校卒業レベルから大学院博士課程修了レベルまでの6段階であり、年収は100万円未満から2000万円以上の14段階で回答を求めた。主観的な社会経済的地位は、Adler, Epel, Castellazzo, & Ickovics (2000) によるMacArthur Scale of Subjective Social Statusを第二著者が日本語訳したうえで使用した。当尺度では、はしごの絵を呈示し、一番上を暮らし向きが最も良い状態の人々とし、一番下を暮らし向きが最も悪い状態の人々とした上で、自分はどの位置にいると思うかを10段階で回答させた。一方、英語母語話者に対しては、性別、年齢、教育程度、人種・民族的なアイデンティティ、英語の流暢さ、英語母語話者であるかどうか、客観的な社会経済的地位、主観的な社会経済的地位を測定した。英語の流暢さはPoorからExcellentまでの3段階であり、英語母語話者であるかどうかについては、YesかNoの名義尺度であった。これらの項目は、本研究の対象が英語母語話者であることから、適切なサンプルを抽出するために設けられた。また、主観的な社会経済的地位についてはAdler et al. (2000) の評定尺度を使用し、はしごの絵を呈示したうえで、一番上の暮らし向きが最も良い状態をBest off、一番下の暮らし向きが最も悪い状態をWorst offとして自分はどの位置にいると思うかを10段階で回答させた。

結 果

各尺度の構成

各尺度の構成について検討するため、それぞれ因子分析を行った。

会話意識尺度 会話意識尺度は、斎藤（2002）において、日本人を対象に作成された尺度である。本研究は、先行研究と比べてサンプルの年代が幅広く、またサンプル数も多いことから、先行研究において示された構造との比較をするために、まず日本人データにおいて因子分析を行った。最尤法、プロマックス回転による因子分析の結果、固有値の減衰状況は、6.684, 4.875, 2.288, 1.710, 1.305, 1.044, 0.966 …であった。どの因子に対しても負荷量が小さかった5項目と、交差負荷を示

した1項目を除外し、再度分析をした結果、固有値の減衰状況（5.803, 4.054, 2.034, 1.636, 1.251, 0.963, 0.852 …）や解釈可能性から5因子解が適当と判断した。結果をTable 1に示す。第1因子は、会話中の視線に対する不安や懸念に関する6項目で構成されていたことから、“視線不安”と命名した。これら6項目の平均値が高いほど、会話中の視線に対する不安や懸念が高いことを意味する。第2因子は相手の内的状態への関心についての6項目で構成されたことから、“内面的関心”と命名した。これら6項目の平均値が高いほど、相手の内的状態への関心が高いことを意味する。第3因子は相手の音声的情報への関心についての4項目で構成されたため、“聴覚情報への関心”と命名した。斎藤（2002）では、会話相手の音声的情報への関心を表す項目のほかに、会話相手の姿勢や態度、しぐさへの関心を表す項目によって構成されたため、“表面的関心”と命名されていた。一方で、本研究では、会話相手の音声的情報への関心を表す項目が集約されて一因子を構成したことから、“聴覚情報への関心”とした。これら4項目の平均値が高いほど、相手の発話の音声的な側面への関心が高いことを意味する。第4因子は会話における沈黙や間に対する不安や懸念に関する5項目であったため、“沈黙懸念”と命名した。これら5項目の平均値が高いほど、会話中の沈黙や間に対する不安や懸念が高いことを意味する。第5因子は自身の会話スキルの高さの認知に関係していた5項目から構成されたことから、“会話への得意意識”と命名した。これら5項目の平均値が高いほど、自身の会話スキルが高いと認知していることを意味する。なお、この因子については、斎藤（2002）では“会話スキル”と命名されていた。しかしながら、項目の内容的特徴から、会話スキルという行動的側面を表すというよりは、自身の会話スキルの認知といった認知的側面を示すものであるとして、本研究では“会話への得意意識”と命名した。

下位尺度間相関を検討した結果（Table 2）、視線不安は内面的関心、聴覚情報への関心、沈黙懸念と有意な正の相関を示した一方で、会話への得意意識と有意な負の相関を示した。また、内面

Table 1
日本人における会話意識尺度の因子構造

項目	因子負荷量				
	F1	F2	F3	F4	F5
F1: 視線不安 ($\alpha = .87$)					
41. 相手と目を合わせて話すほうが話しやすい	.90	-.06	.02	.09	.05
27. 会話中に視線が合うとつい目をそらしてしまう	-.75	-.03	.10	.07	.00
8. 向かい合って話すと、相手のどこを見て話してよいかわからない	-.67	.11	.03	.07	-.06
48. 自分が話しているとき、じっと見つめられると話しづらい	-.67	-.01	.09	.10	.04
13. 相手と向かい合っているほうが話しやすい	.65	.04	.06	.10	-.03
35. 親しくない相手と、互いに目を見て話をすることができる	.60	.02	.08	.03	.21
F2: 内面的関心 ($\alpha = .81$)					
24. 話をしている相手が何を考えているのか気になる	.00	.82	.04	-.05	-.03
31. 話をしているとき、相手がどのような気持ちでいるか気になる	-.03	.81	-.02	-.03	.06
20. 自分の話す内容が相手に正確に伝わっているかどうか気になる	.02	.65	-.06	.00	.04
26. 話をしているとき、相手の表情が気になる	.14	.64	.08	-.03	.04
18. 電話で話をしているとき、相手が何を考えているのか気になる	.02	.61	.10	.06	-.11
19. 苦手な相手と話すときは、いつもより気をつかう	-.03	.35	-.05	-.02	-.02
F3: 聴覚情報への関心 ($\alpha = .78$)					
1. 話し相手のアクセントやイントネーションが気になる	.01	-.01	.85	-.02	-.02
11. 話をするとき、相手の方言が気になる	-.04	-.15	.78	.01	.01
34. 話している相手の口癖が気になる	.30	.13	.64	.03	.01
25. 話をするとき、相手の話す速さが気になる	-.01	.17	.45	-.05	-.03
F4: 沈黙懸念 ($\alpha = .77$)					
37. 親しい人と話すとき、沈黙が気になる	.08	-.09	.02	.83	-.01
10. 電話で親しい人と話すとき、沈黙が気になる	.16	-.06	.04	.83	-.05
5. 会話がとぎれることに耐えることができない	-.10	-.01	-.05	.57	.02
22. 電車やバスの中で、偶然知り合いと会ったとき沈黙が気になる	-.19	.19	-.05	.39	.00
52. 初対面の人と話すとき、沈黙が気になる	-.16	.17	-.03	.39	.12
F5: 会話への得意意識 ($\alpha = .73$)					
4. 話の間にあいたとき、自分から話を切り出すことができる	.02	-.01	.06	.01	.76
15. 興味が無い話しの内容でも、相手にあわせることができる	.05	.12	-.16	.03	.62
23. 会話のテンポを相手にあわせることができる	-.02	.06	-.08	.02	.60
9. 初対面の人に対してでも、すぐにうちとけて話しをすることができる	.17	-.09	.07	.01	.56
36. 会って話をしているときに、自分から会話を切り上げることができる	-.07	-.17	.11	-.15	.36
因子間相関	F1	-	-.22	-.11	-.33
	F2		-	.35	.50
	F3			-	.26
	F4				-
					-.16

注) 項目2「会話中の相手の姿勢や態度が気になる」、項目6「話をしているとき、相手のしぐさに目がいってしまう」、項目7「話をしているとき、相手の声の大きさが気になる」、項目21「自分ばかりが話をしていないか注意している」、項目29「電話をかけるとき、相手の都合に配慮する」、項目30「話し相手の間が気になる」は削除された。

Table 2
日本人における会話意識尺度、WTC、UCSの下位尺度間相関

	会2	会3	会4	会5	W1	W2	U1	U2
会1. 視線不安	.17 ***	.11 *	.31 ***	-.57 ***	-.31 ***	-.32 ***	-.58 ***	-.42 ***
会2. 内面的関心	-	.33 ***	.41 ***	.00	-.04	-.01	-.23 ***	.04
会3. 聴覚情報への関心		-	.21 ***	.04	-.14 **	.05	-.05	-.14 **
会4. 沈黙懸念			-	-.19 ***	-.08 †	-.12 **	-.34 ***	-.19 ***
会5. 会話への得意意識				-	.27 ***	.37 ***	.65 ***	.39 ***
W1. 面識のある他者との会話場面					-	.50 ***	.31 ***	.42 ***
W2. 面識のない他者との会話場面						-	.44 ***	.22 ***
U1. AA (接近)							-	.37 ***
U2. R (報酬)								-

† $p < .10$; * $p < .05$; ** $p < .01$; *** $p < .001$

的関心は聴覚情報への関心および沈黙懸念と有意な正の相関を示し、聴覚情報への関心は沈黙懸念と有意な正の相関を示した。さらに、沈黙懸念と会話への得意意識との間では、有意な負の相関がみられた。

次に、英語母語話者についても同様の方法で因子分析を行った結果、固有値の減衰状況は、7.810, 3.614, 1.747, 1.353, 1.281, 1.195, 1.052 …であった。全ての因子に対して不十分な負荷量を示した3項目や、交差負荷を示した1項目、削除

Table 3
英語母語話者における会話意識尺度の因子構造

項目	因子負荷量				
	F1	F2	F3	F4	F5
F1：視線不安 ($\alpha = .82$)					
27. When my eyes meet the other person's during conversation, I subconsciously look away	.88	-.11	-.01	.00	-.11
8. When I talk face-to-face, I don't know where on the other person to look while talking	.73	.03	.08	-.04	.01
35. I can make eye contact while talking to someone I am not close to	-.68	-.06	-.01	-.02	-.11
48. When I am talking, it's difficult to speak if I am being stared at	.65	-.16	.02	-.06	.07
41. It's easier to talk when making eye contact with the other person	-.57	-.14	.13	-.02	-.15
13. It's easier to talk when face-to-face with the other person	-.34	-.10	.10	.01	-.11
F2：内面的関心 ($\alpha = .80$)					
18. When talking to someone on the phone, I am attentive to what they are thinking	-.02	.80	-.22	.00	.13
24. I am attentive to what the person I am talking to is thinking	-.02	.74	-.05	-.03	.08
31. When talking to someone, I am attentive to how they're feeling	-.06	.70	.02	-.06	-.01
34. I notice the habit of the person I am talking to	.01	.45	.25	-.09	-.07
20. I am attentive to whether what I am talking about is being accurately communicated to the other person	.11	.35	.22	.09	-.01
26. When talking to someone, I notice their facial expressions	.26	.35	.30	.11	-.18
6. When talking to someone, my eyes are drawn toward their gestures	-.16	.32	.14	.04	.11
F3：聴覚情報への関心 ($\alpha = .76$)					
1. I notice the accent and intonation of the person I am talking to	-.07	-.02	.79	-.09	.08
11. When I talk to someone, I notice their dialect	-.13	-.16	.79	.00	.19
7. When talking to someone, I notice the volume of their voice	.13	.10	.54	.06	-.14
25. When talking to someone, I notice the speed at which they talk	.04	.02	.52	.00	.12
F4：沈黙への関心 ($\alpha = .77$)					
10. When I talk to someone I'm close to on the phone, I notice silences	.01	-.10	-.13	.88	.05
37. When I talk to someone I am close to, I notice silences	.05	-.14	-.06	.82	.14
30. I notice pauses by the person I am talking to	.02	.12	.23	.44	-.04
52. When I talk to someone for the first time, I notice silences	-.08	.15	.17	.42	-.19
22. When I meet an acquaintance by chance on a train or bus, I notice silences	-.24	.14	.09	.41	-.04
F5：会話への得意意識 ($\alpha = .75$)					
4. When there is a pause in the conversation, I can bring up a topic myself	.06	.02	.12	-.02	.62
15. I can adjust to the other person even with topics of conversation I am not interested in	-.02	.08	.09	.03	.54
9. I can open up and talk to someone right away even if I am meeting them for the first time	.13	.11	-.15	.05	.51
23. I can match the conversation's tempo with the other person	.04	.20	.18	-.03	.47
36. When I meet someone and am talking to them, I can wrap up the conversation myself	.11	-.12	.18	.05	.47
因子間相関					
	F1	-.29	.27	.06	.50
	F2		-.64	.44	.42
	F3			-.52	.34
	F4				-.11

注) 項目2「I notice the posture and attitude of the other person during conversation」, 項目5「I can't stand it when there's a break in the conversation」, 項目19「When I talk to someone I don't get along with, I am more careful than usual」, 項目21「I make sure I am not the only one talking」, 項目29「When I call someone on the phone, I take their schedule into account」は削除された。

した場合に因子の α 係数が上昇することを示した1項目を除外し再度分析をした結果, 固有値の減衰状 (6.923, 3.406, 1.715, 1.318, 1.290, 1.024, 0.919 …) と解釈可能性から日本人データと同じく5因子解が適当と判断した (Table 3)。第1因子は会話中の視線に対する不安や懸念に関する6項目から構成されたため, “視線不安” と命名した。第2因子は相手の内的状態への関心に関連する7項目で構成されたことから, “内面的関心” と命名した。第3因子は相手の音声的情報への関心に関する4項目で構成されたため, “聴覚情報への関心” と命名した。第4因子は会話における

沈黙や間への関心についての5項目であったため, “沈黙への関心” と命名した。これら5項目の平均値が高いほど, 会話中の沈黙や間への関心が高いことを意味する。第5因子は自身の会話スキルの高さの認知に関係する5項目から成ったため, “会話への得意意識” と命名した。

下位尺度間相関を検討した結果 (Table 4), 視線不安は内面的関心, 聴覚情報への関心, 会話への得意意識とそれぞれ有意な負の相関を示した。また, 内面的関心は聴覚情報への関心, 沈黙への関心, 会話への得意意識と, そして聴覚情報への関心は沈黙への関心および会話への得意意識と有

Table 4
英語母語話者における会話意識尺度, WTC, UCSの下位尺度間相関

	会2	会3	会4	会5	W1	W2	U1	U2
会1. 視線不安	-.26 ***	-.22 ***	.02	-.50 ***	-.30 ***	-.34 ***	-.57 ***	-.45 ***
会2. 内面的関心	-	.57 ***	.39 ***	.47 ***	.14 **	.13 **	.24 ***	.34 ***
会3. 聴覚情報への関心		-	.42 ***	.43 ***	.19 ***	.14 **	.14 **	.23 ***
会4. 沈黙への関心			-	.18 ***	.00	-.08 †	-.09 †	.07
会5. 会話への得意意識				-	.31 ***	.43 ***	.68 ***	.46 ***
W1. 負荷の低い会話場面					-	.62 ***	.33 ***	.39 ***
W2. 負荷の高い会話場面						-	.56 ***	.30 ***
U1. Approach Avoidance							-	.47 ***
U2. Reward								-

† $p < .10$; * $p < .05$; ** $p < .01$; *** $p < .001$

意な正の相関を示した。さらに、沈黙への関心と会話への得意意識の間においても有意な正の相関がみられた。

WTC 日本人データについて最尤法, プロマックス回転で因子分析を行った結果, 固有値の減衰状況は5.925, 1.887, 0.881, 0.625 …となり, 解釈可能性も考慮した結果, 2因子解を採用した (Table 5)。第1因子は, 知人や友人との会話場面に関する8項目から成ったため, “面識のある他者との会話場面”と命名した。これら8項目の平均値が高いほど, 知人や友人など面識のある他者との会話場面において, 会話を始めることにより積極的であることを意味する。第2因子は見知らぬ人との会話場面についての4項目で構成されたことから, “面識のない他者との会話場面”と命名した。これら4項目の平均値が高いほど, 未知である他者との会話場面において会話を始めることにより積極的であることを意味する。

各下位尺度得点が非正規分布であったことから, 平方根変換を行ったのち下位尺度間でSpearmanの順位相関係数を算出した結果, 有意な正の相関が確認された (Table 2)。先行研究 (McCroskey, 1992) では, 話し相手3種類 (Stranger, Acquaintance, and Friend) と, コミュニケーションの状況4種類 (Dyad, Group, Meeting, and Public) といった7因子構造がみられたが, 本研究の日本人データでは, 会話をする相手との面識の有無によって2因子が構成された。

次に, 英語母語話者についても同様の方法で因子分析を行った。最尤法, プロマックス回転による因子分析の結果, 固有値の減衰状況は, 6.443,

1.554, 1.098, 0.631 …であった。交差負荷を示した2項目を除外して再度因子分析を行った結果, 固有値の減衰状況 (5.316, 1.560, 0.920, 0.541 …) から2因子解が適当と判断した (Table 6)。第1因子は, 知人や友人との一対一または少人数グループでの会話に関する5項目から成ったため, “負荷の低い会話場面”と命名した。これら5項目の平均値が高いほど, 負荷のかからない会話場面において, 会話を始めることに積極的であることを意味する。第2因子は見知らぬ人との会話や, 知人や友人とではあるがより大規模な会話場면을想定する5項目であったことから, “負荷の高い会話場面”と命名した。これら5項目の平均値が高いほど, 負荷のかかるような会話場面において会話を始めることにより積極的であることを意味する。

これらの下位尺度得点でも正規性が確認されなかったことから, 平方根変換を行ったのちSpearmanの順位相関係数を算出した結果, 有意な正の相関がみられた (Table 4)。英語母語話者においても, 先行研究 (McCroskey, 1992) と因子構造の相違が確認された。つまり, 話し相手の種類や, コミュニケーション状況ではなく, 会話の負荷の程度によって2因子が構成された。

UCS 日本人データについて, 最尤法, プロマックス回転による因子分析を行った結果, 固有値の減衰状況は7.080, 3.278, 1.319, 1.126 …であった。固有値の減衰状況と解釈可能性から2因子解が適当と判断した (Table 7)。第1因子は, 対人状況に対して不安や恐怖を感じるかや, 積極的にコミュニケーションに従事するか否かの傾向

Table 5
日本人におけるWTCの因子構造

項目	因子負荷量	
	F1	F2
F1：面識のある他者との会話場面 ($\alpha = .91$)		
19. 友人たちとの小さなグループで話をする	.91	-.19
9. 列に並んでいる時に友人と話をする	.85	-.24
4. 列に並んでいる時に知人と話をする	.76	-.08
15. 知人たちとの小さなグループで話をする	.67	.14
6. 友人たちとの大規模な集まりで話をする	.67	.16
14. 友人たちのグループに対して話を披露する	.64	.16
11. 知人たちとの大規模な集まりで話をする	.58	.32
20. 知人たちのグループに対して話を披露する	.54	.32
F2：面識のない他者との会話場面 ($\alpha = .84$)		
3. 見知らぬ人たちのグループに対して話を披露する	-.18	.95
8. 見知らぬ人たちとの小さなグループで話をする	.03	.78
17. 見知らぬ人たちとの大規模な集まりで話をする	.01	.76
12. 列に並んでいる時に見知らぬ人たちと話をする	-.02	.60
因子間相関		F2 .54

Table 6
英語母語話者におけるWTCの因子構造

項目	因子負荷量	
	F1	F2
F1：負荷の低い会話場面 ($\alpha = .89$)		
19. Talk in a small group of friends	.95	-.09
9. Talk with a friend while standing in a line	.86	-.17
6. Talk in a large meeting of friends	.73	.08
15. Talk in a small group of acquaintances	.69	.20
4. Talk with an acquaintance while standing in line	.62	.14
F2：負荷の高い会話場面 ($\alpha = .86$)		
3. Present a talk to a group of strangers	-.16	.90
17. Talk in a large meeting of strangers	-.01	.84
8. Talk in a small group of strangers	.07	.78
20. Present a talk to a group of acquaintances	.23	.56
12. Talk with a stranger while standing in line	.01	.58
因子間相関		F2 .59

注) 項目11「Talk in a large meeting of acquaintances」、項目14「Present a talk to a group of friends」は削除された。

を示すApproach Avoidance (AA; 接近) であった。この因子を構成した10項目の平均値が高いほど、会話やコミュニケーションを避ける傾向が低い、つまりそれら相互作用に対して積極的であることを意味する。第2因子は家族や友人がどの程度自身に会話や意見を求めているかや、他者との

相互作用が操作的で不誠実だと感じるか否かに関する Reward (報酬) であった。これら10項目の平均値が高いほど、他者との相互作用を報酬的とみなすことを意味する。

下位尺度間相関を検討した結果、有意な正の相関がみられた (Table 2)。

Table 7
日本人におけるUCSの因子構造

項目	因子負荷量	
	F1	F1
F1 : AA (接近; $\alpha = .92$)		
2. 恥ずかしがり屋なのであまり話すほうではない	.84	-.04
3. 恥ずかしがり屋ではないのでよく話すほうだ	-.81	.02
7. 集団の中で自分よく話すほうだ	-.78	.06
9. 私はグループディスカッションを避ける	.74	.04
8. 集団の中で自分を表現するのは怖いと思う	.74	.00
13. 見知らぬ人と会話することは簡単だと思う	-.73	.10
6. 他の人に話しかけなければならないとき、不安になる	.70	.03
4. グループディスカッションに参加することが好きだ	.69	.00
1. 会話において発言することは怖いと思う	.68	.20
12. 会話中は、聞くよりも話すほうが好きだ	-.49	-.10
F2 : R (報酬; $\alpha = .85$)		
16. 私の友人たちや家族は、私の考えや提案に耳を傾けてくれない	-.06	.87
21. 私の友人たちや家族は、私の考えや提案に耳を傾けてくれる	.07	.84
19. 私の友人たちや家族は、私の気持ちを理解してくれていると思う	-.03	-.77
20. 私の家族は、私の興味や活動について私と話し合うことを楽しまない	.00	.68
17. 私の友人たちは、私に対して正直だと思う	.02	-.57
15. 私の友人たちは、私とコミュニケーションをする時は誠実でないと思う	-.08	.55
18. 決断しなければならぬとき、家族や友人たちからアドバイスを求めることはしない	.06	.48
23. 他の人たちが私に友好的なのは、私から何かを得たいからだけである	-.11	.45
22. 私の友人たちは、私に意見やアドバイスを求めてくる	-.26	-.38
24. 他の人たちと話すことは時間の無駄でしかない	.24	.36
因子間相関	F2	.39

Table 8
英語母語話者におけるUCSの因子構造

項目	因子負荷量	
	F1	F1
F1 : Approach Avoidance ($\alpha = .93$)		
2. I talk less because I'm shy	.90	-.10
3. I talk a lot because I am not shy	-.81	.13
6. I feel nervous when I have to speak, to others	.80	.05
13. I find it easy to make conversation with strangers	-.78	.08
1. I'm afraid to speak up in conversations	.78	.08
8. I am afraid to express myself in a group	.75	.15
7. I have no fears about expressing myself in a group	-.75	-.04
9. I avoid group discussions	.72	.13
4. I like to get involved in group discussions	-.71	-.06
12. During a conversation, I prefer to talk rather than listen	-.53	.23
F2 : Reward ($\alpha = .87$)		
16. My friends and family don't listen to my ideas and suggestions	-.05	.82
21. My friends and family listen to my ideas and suggestions	.01	-.77
20. My family doesn't enjoy discussing my interests and activities with me	.02	.73
19. I believe my friends and family understand my feelings	.03	-.73
17. I think my friends are truthful with me	.10	-.67
15. I don't think my friends are honest in their communication with me	-.07	.62
23. Other people are friendly only because they want something out of me	.02	.61
18. I don't ask for advice from family or friends when I have to make decisions	-.11	.58
22. My friends seek my opinions and advice	-.13	-.46
24. Talking to other people is just a waste of time	.25	.42
因子間相関	F2	.51

また、英語母語話者においても同様の方法で因子分析結果を行った結果、固有値の減衰状況(8.189, 2.694, 1.022, 1.002 ...)と解釈可能性から、先行研究と同様の2因子構造を示し、つまり

第一因子はApproach Avoidance (AA)、第2因子はReward (R) であった (Table 8)。

下位尺度間相関を検討した結果、有意な正の相関がみられた (Table 4)。

Table 9
日本人における会話に対する態度と人口統計学的変数の偏相関係数

	年齢	教育程度	収入	主観的SES
< 会話意識尺度 >				
視線不安	-.23 ***	-.07	-.09 †	-.10 *
内面的関心	-.01	.06	.01	-.07
聴覚情報への関心	.12 **	.07	.05	-.05
沈黙懸念	.00	-.02	.00	-.03
会話への得意意識	.13 **	.08 †	.12 **	.18 ***
< WTC > ※Spearman偏順位相関係数				
面識のある他者との会話場面	.04	.11 *	.12 **	.06
面識のない他者との会話場面	.17 ***	.09 †	.08 †	.09 †
< UCS >				
AA (接近)	.13 **	.04	.09 *	.27 ***
R (報酬)	.02	-.05	.08 †	.26 ***

† $p < .10$; * $p < .05$; ** $p < .01$; *** $p < .001$

会話に対する態度間の関係

会話に対する態度の各尺度の関係を明らかにするため、まず日本人データにおいて、会話意識尺度、WTC、UCSの下位尺度間相関を算出した (Table 2)。会話意識尺度の視線不安は、WTCの面識のある他者との会話場面、面識のない他者との会話場面、UCSのAA (接近)、R (報酬) と有意な負の相関を示した。同様に、会話意識尺度の沈黙懸念は、WTCの面識のない他者との会話場面、UCSのAA (接近)、R (報酬) と、聴覚情報への関心は、WTCの面識のある他者との会話場面、UCSのR (報酬) と、内面的関心はUCSのAA (接近) とそれぞれ有意な負の相関を示した。一方で、会話への得意意識とWTCの面識のない他者との会話場面、面識のある他者との会話場面、UCSのAA (接近)、R (報酬) との間ではそれぞれ有意な正の相関がみられた。WTCの面識のある他者との会話場面、面識のない他者との会話場面はUCSのAA (接近)、R (報酬) とそれぞれ有意な正の相関を示した。

同様に、英語母語話者においても下位尺度間相関を算出し、各尺度の関連について検討した (Table 4)。その結果、会話意識尺度の視線不安はWTCの負荷の低い会話場面、負荷の高い会話場面、UCSのAA、Rと有意な負の相関を示した。一方で、会話意識尺度の内面的関心、聴覚情報へ

の関心、会話への得意意識は、WTCの負荷の低い会話場面、負荷の高い会話場面、UCSのAA、Rとの間でそれぞれ有意な正の相関を示した。また、WTCの負荷の低い会話場面、負荷の高い会話場面はUCSのAA、Rとそれぞれ有意な正の相関を示した。

人口統計学的変数との関連

会話に対する態度と人口統計学的変数の関係を明らかにするため、まず日本人データにおいて、他の人口統計学的変数を統制したうえで、会話意識尺度、WTC、UCSの各下位尺度と年齢、教育程度、収入、主観的社会経済的地位の偏相関係数を算出した (Table 9)。なお、WTCは分布に歪みがみられたため、平方根変換を行ったのちSpearmanの偏順位相関係数を算出した。その結果、年齢は会話意識尺度の視線不安と有意な負の相関を、会話意識尺度の聴覚情報への関心、会話への得意意識、WTCの面識のない他者との会話場面、そしてUCSのAA (接近) と有意な正の相関を示した。また、教育程度とWTCの面識のある他者との会話場面との間で有意な正の相関がみられ、収入は会話意識尺度の会話への得意意識とWTCの面識のある他者との会話場面、UCSのAA (接近) と有意な正の相関を示した。さらに、主観的社会経済的地位は、会話意識尺度の視線不

Table 10
英語母語話者における会話に対する態度と人口統計学的変数の偏相関係数

	年齢	教育程度	収入	主観的SES
<会話意識尺度>				
視線不安	-.28 ***	-.02	-.06	-.08 †
内面的関心	-.01	.00	.02	.01
聴覚情報への関心	.08	-.03	.00	.00
沈黙への関心	.07	-.08 †	.04	-.06
会話への得意意識	.18 ***	-.05	-.02	.19 ***
<WTC> ※Spearman偏順位相関係数				
負荷の低い会話場面	.14 **	.07	.07	.08 †
負荷の高い会話場面	.19 ***	.10 *	-.02	.14 **
<UCS>				
Approach Avoidance	.23 ***	.03	.00	.21 ***
Reward	.12 **	-.06	.11 *	.13 **

† $p < .10$; * $p < .05$; ** $p < .01$; *** $p < .001$

安と有意な負の相関を示した一方で、会話への得意意識、UCSのAA（接近）、R（報酬）と有意な正の相関を示した。しかしながら、有意ではあるものの偏相関係数の値は全体的に小さかった。

英語母語話者のデータにおいても同様の方法で分析を行ったところ（Table 10）、年齢は会話意識尺度の視線不安と有意な負の相関を、会話意識尺度の会話への得意意識、WTCの負荷の低い会話面、負荷の高い会話場面、UCSのAA、Rと有意な正の相関を示した。また、教育程度は負荷の高い会話場面と、収入はUCSのRとそれぞれ有意な正の相関を示した。主観的社会経済的地位は会話意識尺度の会話への得意意識、WTCの負荷の高い会話場面、UCSのAA、Rと有意な正の相関を示した。しかしながら、日本人データと同様に偏相関係数の値は全体的に小さかった。

さらに、各尺度の各下位尺度得点を従属変数、性別を独立変数として t 検定を行った結果、日本人では、会話意識尺度の会話への得意意識と、UCSのR（報酬）において性差がみられ（順に、 $t(485) = -4.218$, $p < .001$, $d = -.382$; $t(485) = -5.162$, $p < .001$, $d = -.468$ ）、女性の方が男性よりも有意に得点が高かった。英語母語話者では、内面的関心においてのみ性差がみられ、女性の方が男性よりも有意に得点が高かった（ $t(469) = 2.103$, $p = .036$, $d = -.194$ ）。

考 察

本研究では、日本人と英語母語話者を対象に、会話意識尺度、WTC、UCSの3つの尺度に着目して、会話への態度について検討した。因子構造や各尺度の下位尺度間相関、また人口統計学的変数との関連から、日本人と英語母語話者において、会話やコミュニケーションに対する態度に違いがみられた。具体的には以下のような結果であった。

各尺度の構造および下位尺度間の関係について

会話意識尺度とWTCにおいては因子の内容的特徴が日本人と英語母語話者で異なることが明らかとなった。まず、日本人の会話意識については、斎藤（2002）において抽出された表面的関心の項目のうち、本研究では相手の音声的情報への関心についての項目のみが集約され、聴覚情報への関心という因子を構成した。また、会話の得意意識についても、斎藤（2002）では会話スキルと命名されたものの、項目の内容的特徴から、自身の会話スキルの認知といった認知的側面を示すものであるとして、本研究では会話への得意意識と命名した点においては違いがみられた。さらに、日本人と英語母語話者における因子構造を比較すると、日本人では沈黙懸念であったのに対し、英語母語話者では沈黙への関心となったことから、英語母

語話者では、沈黙に対する態度が必ずしも不安や懸念を表すものではなかった点において、会話への態度を構成する要素が日本人のそれとは異なる可能性が示唆された。

WTCについても同様に因子構造の違いが明らかになった。具体的には、日本人では会話をする相手との面識の有無によって項目がそれぞれ集約されたのに対して、英語母語話者では、会話場面の負荷の程度によって因子が構成された。このことから、会話を始めようとする、または従事しようとする意識や動機が、日本人と英語母語話者の間で異なる可能性がある。

また、各尺度間の関連を検討した結果、日本人と英語母語話者の、会話に対する態度における類似性や差異が明らかとなった。日本人と英語母語話者のいずれにおいても、視線不安の高い者は会話やコミュニケーションに対して消極的であり、会話自体を報酬的とみなさない傾向があることがわかった。対人不安の傾向と注視パターンの関連を検討した先行研究において、不安が高い者ほど目を見ない傾向があることが指摘されているが（Moukheiber et al., 2010など）、Wieser, Pauli, Alpers, and Mühlberger (2009) においては、対人不安が高い者ほど目を見る傾向があるとの結果が得られているため、研究間で結果は一致していない。他者との相互作用における視線への不安や懸念について、文化比較を行った研究はみられないが、この結果は会話やコミュニケーション時の視線に対する態度に、文化的な差異がある可能性を示唆している。さらに、日本人と英語母語話者のいずれにおいても、自身の会話スキルの認知が高いと、会話やコミュニケーションに対してより積極的で、他者との相互作用を報酬的と捉えていた。

一方で、日本人においては、内面的関心、聴覚情報への関心、沈黙懸念が高いと、会話やコミュニケーションを避けたり、報酬的とみなさない傾向があることが明らかになった。それに対して、英語母語話者では内面的関心や聴覚情報への関心が高い場合に会話場面に対する積極性が高くなり、会話自体を報酬的とみなすことがわかった。つまり、日本人と比べて英語母語話者は、相手の内的

状態や音声的情報への関心が強い場合に会話やコミュニケーションに対してより積極的な態度をもつといえる。このことは、日本人と英語母語話者の会話やコミュニケーションに対する態度の違いを示唆している。

人口統計学的変数との関連

日本人と英語母語話者の両方において、年齢が視線不安と有意な負の相関を、会話への得意意識やAA（接近）と正の相関を示したことから、年齢が高いほど会話中の視線に対する不安や懸念が低く、また自身の会話スキルの認知が高く、そして会話に対して積極的である傾向が高いといえる。さらに、日本人では、年齢が高いと会話相手の音声的情報への関心が強く、面識のない他者との会話場面に対する積極性も高いことが明らかになった。一方の英語母語話者では、年齢が高いほど負荷の低い・高いに関わらずコミュニケーションに対して積極的であり、会話自体を報酬的とみなすことがわかった。日本人と英語母語話者のどちらにおいても、年齢の高さが、会話やコミュニケーションに対する態度の諸要素に広範に関連していることが示されたが、相関の仕方がそれぞれ異なっていることから、会話やコミュニケーションに対する態度と人口統計学的変数との関連において違いがあることを示唆している。また、日本人と英語母語話者のどちらにおいても、主観的社会経済的地位が高いと自身の会話スキル認知が高く、会話やコミュニケーションを避けようとはせず、他者との相互作用を報酬的とみなしていたことから、会話やコミュニケーションに対する態度と、自身の主観的な社会経済的地位の認識との関連があることも示された。

さらに、日本人では会話への得意意識とR（報酬）において、そして英語母語話者では内面的関心において女性の方が男性よりも有意に得点が高かったことから、部分的にはあるものの、会話への態度において性差がみられた。女性の方が男性よりも非言語に関する知識量が多いことや解読の正確さが高いことが明らかにされており（Rosip & Hall, 2004; Hall, Hutton, & Morgan, 2010など）、また女性の方が解読に対する動機が

高いのではないかという指摘があるが (Ickes, Gesn, & Graham, 2000), 本研究はそれを裏付けている。

本研究のまとめと今後の課題

本研究では、日本人と英語母語話者が会話やコミュニケーションに対してどのような態度を形成しているのかを検討した。結果として、日本人と英語母語話者では会話やコミュニケーションに対する態度に差異があることが示唆された。これまで、記号化や解読などコミュニケーション行動のスキルや正確さが対人コミュニケーション研究において特に重要視されてきた。しかしながら、コミュニケーション行動のパフォーマンスには文化、文脈情報、動機付け、認知的要因を含む多様な要因が影響しうることが考えられ、それら諸要素が互いにどのように作用し、コミュニケーション行動に影響を与えているかは未だ明確でない。したがって、会話やコミュニケーションに対する態度がコミュニケーション行動とどのような関連を有するのかについて検討していくことは、対人コミュニケーションをより包括的に捉えるためにも重要であろう。今後の課題として、態度などの認知的側面、コミュニケーション行動、文化を含むコンテキストなどのメカニズムやプロセスを明確にすることが挙げられる。特に、対人コミュニケーションについて考えるうえで、文化的影響の存在を無視することはできない。情動表出や解読のコミュニケーション行動には、それぞれの文化に固有である社会的規範や信念、期待が大きく影響することは前述の通り広く指摘されている。個人が持つ、会話やコミュニケーションに対する態度の違いや、態度が形成されるプロセスがどのようなものであるかを明らかにしていくためには、文化比較的な視点を持ったうえで研究を展開していくことが期待される。

引用文献

- Adler, N. E., Epel, E. S., Castellazzo, G., & Ickovics, J. R. (2000). Relationship of subjective and objective social status with psychological and physiological functioning: preliminary data in healthy, White women. *Health Psychology, 19*, 586-592.
- 相川 充 (1991). 特性シャイネス尺度の作成および信頼性と妥当性の検討に関する研究 心理学研究, 62, 149-155.
- Beaupré, M. G., & Hess, U. (2005). Cross-cultural emotion recognition among Canadian ethnic groups. *Journal of Cross-Cultural Psychology, 36*, 355-370.
- Booth-Butterfield, S., & Gould, M. (1986). The communication anxiety inventory: Validation of state-and context-communication apprehension. *Communication Quarterly, 34*, 194-205.
- Buck, R. (1984). *The communication of emotion*. New York: Guilford Press.
- Burgoon, J. K. (1976). The unwillingness-to-communicate scale: Development and validation. *Communication Monographs, 43*, 60-69.
- 大坊 郁夫 (2006). コミュニケーション・スキルの重要性 日本労働研究雑誌, 48, 13-22.
- 大坊 郁夫 (2008). 社会的スキルの階層的概念 対人社会心理学研究, 8, 1-6.
- Ekman, P. (1973). Cross-cultural studies of facial expression. In P. Ekman (Ed.), *Darwin and facial expression: A century of research in review*, (pp.169-222). New York: Academic Press.
- Ekman, P., & Friesen, W. V. (1969). The repertoire of nonverbal behavior: Categories, origins, usage, and coding. *Semiotica, 1*, 49-98.
- Ekman, P., & Friesen, W. V. (1975). *Unmasking the face: A guide to recognizing emotions from facial clues*. Upper Saddle River, N.J.: Prentice Hall.
- Elfenbein, H. A. (2013). Nonverbal dialects and accents in facial expressions of emotion. *Emotion Review, 5*, 90-96.

- Elfenbein, H. A., & Ambady, N. (2002). On the universality and cultural specificity of emotion recognition: a meta-analysis. *Psychological Bulletin*, 128, 203.
- Elfenbein, H. A., & Ambady, N. (2003). Universals and cultural differences in recognizing emotions. *Current Directions in Psychological Science*, 12, 159-164.
- Elfenbein, H. A., Beaupré, M., Lévesque, M., & Hess, U. (2007). Toward a dialect theory: Cultural differences in the expression and recognition of posed facial expressions. *Emotion*, 7, 131-146.
- 藤本 学・大坊 郁夫 (2007). コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み パーソナリティ研究, 15, 347-361.
- Hall, J. K., Hutton, S. B., & Morgan, M. J. (2010). Sex differences in scanning faces: Does attention to the eyes explain female superiority in facial expression recognition? *Cognition & Emotion*, 24, 629-637.
- Ickes, W., Gesn, P. R., & Graham, T. (2000). Gender differences in empathic accuracy: Differential ability or differential motivation? *Personal Relationships*, 7, 95-109.
- 木村 昌紀・磯 友輝子・大坊 郁夫 (2004). 関係継続の予期が対人コミュニケーションに及ぼす影響 電子情報通信学会技術研究報告. HCS, ヒューマンコミュニケーション基礎, 104, 1-6.
- 木村 昌紀・磯 友輝子・大坊 郁夫 (2011). 関係に対する展望が対人コミュニケーションに及ぼす影響——関係継続の予期と関係継続の意思の観点から—— 実験社会心理学研究, 51, 69-78.
- Matsumoto, D. (1999). American-Japanese cultural differences in judgements of expression intensity and subjective experience. *Cognition & Emotion*, 13, 201-218.
- Matsumoto, D. (2002). Methodological requirements to test a possible in-group advantage in judging emotions across cultures: Comment on Elfenbein and Ambady (2002) and evidence. *Psychological Bulletin*, 128, 236-242.
- McCroskey, J. C. (1992). Reliability and validity of the willingness to communicate scale. *Communication Quarterly*, 40, 16-25.
- Moukheiber, A., Rautureau, G., Perez-Diaz, F., Soussignan, R., Dubal, S., Jouvent, R., & Pelissolo, A. (2010). Gaze avoidance in social phobia: Objective measure and correlates. *Behaviour Research and Therapy*, 48, 147-151.
- 中村 真 (1991). 情動コミュニケーションにおける表示・解読規則——概念的検討と日米比較調査—— 大阪大学人間科学部紀要, 17, 115-145.
- 中村 真 (2000). 表情と感情のコミュニケーション——表示規則と感情表出のモデル—— 心理学評論, 43, 307-317.
- 小川 一美 (2012). 良好なコミュニケーションとは何か? 対人コミュニケーションの社会心理学 吉田 俊和・橋本 剛・小川 一美 (編著) 対人関係の社会心理学 (pp.1-22) ナカニシヤ出版
- Rosip, J. C., & Hall, J. A. (2004). Knowledge of nonverbal cues, gender, and nonverbal decoding accuracy. *Journal of Nonverbal Behavior*, 28, 267-286.
- 斎藤 和志 (2002). 会話意識尺度作成の試み 愛知淑徳大学論集——コミュニケーション学部篇——, 2, 35-45.
- 多川 則子・小川 一美・斎藤和志 (2006). 日常のコミュニケーションにおける話題の収集を目指して: テーマの重要性判断に基づく検討 対人社会心理学研究, 6, 71-79.
- 遠矢 幸子 (2003). 友人関係の親密性コントロールに関わるストラテジー——セルフモニタリ

ング傾向との関連について—— 香蘭女子短期大学研究紀要, 46, 201-206.

Wieser, M. J., Pauli, P., Alpers, G. W., & Mühlberger, A. (2009). Is eye to eye

contact really threatening and avoided in social anxiety? An eye-tracking and psychophysiology study. *Journal of Anxiety Disorders*, 23, 93-103.

A study of Japanese and native English speakers' attitudes toward conversation

Yunoshin Shimizu and Kazumi Ogawa

Abstract:

This study examined Japanese and native English speakers' attitudes toward conversation by focusing on three scales: Conversation Awareness Scale, Willingness to Communicate (WTC) Scale, and Unwillingness to Communicate Scale (UCS). Factor analysis of the Conversation Awareness Scale yielded the "concern for silence" subscale in the Japanese sample, whereas "interest for silence" was found in native English speakers. While the factor structure of WTC in the Japanese sample was based on whether one is personally acquainted, the level of conversational load was determinant of factor structure in native English speakers. For the UCS, as in the previous study, two subscales, "approach avoidance" and "reward," were found in both samples. Subsequently, correlation analysis between each subscale was conducted and it revealed that correlations differed between Japanese and native English speakers. Moreover, partial correlation coefficients were examined between each subscale and demographic variables, and the results indicated that in both samples, age had significant negative correlations with "gaze anxiety" of the Conversation Awareness Scale and positive correlations with the "awareness of being good at conversation" while there was a difference as age also had a significant correlation with "interest for auditory information" in the Japanese samples. Furthermore, in Japanese, women's scores on "awareness of being good at conversation" and "reward" were significantly higher than males. Likewise, in native English speakers, women scored significantly higher than males on the "interest for internal state" of the Conversation Awareness Scale.

Key words: attitudes toward conversation, Conversation Awareness Scale,
Willingness to Communicate Scale, Unwillingness to Communicate Scale